

神奈川大学人文学会五〇年史に代えて

歴史の四〇年周期

近 藤 正 栄

人間に寿命というものがあるように、歴史の進展には一定のライフサイクルがあるが、その基本となるサイクルは四〇年を一単位として考えるのが便利である。人間ならば、四〇歳前後に厄年を迎え、それを無事に過ぎると次の四〇年のサイクルに進み八〇歳になる。さらにもう一回繰り返して一二〇歳までが人間が生きられる限度である。私は一つの組織体の歴史サイクルも同様に四〇年を一区切りとみている。私が神奈川大学に奉職したのは昭和四三年（一九六八年）、まさに創立四〇周年記念の年であった。しかし、この年にその後の神大の歴史を運命づける大異変が起った。いわゆる学園紛争の勃発である。以後十数年にわたって学園は不毛の停滞期となった。いいかえれば、組織体の歴史の第二サイクルに突入した途端に生じた病的異変であった。

日本の大学に吹き荒れた学園紛争は、中国で発生した文化大革命（一九六六～七六年）という疫病の上陸であった。中国では、文化大革命期を「失われた十年」として位置づけているが、そのように日本においても猛威をふる

ったのが学園紛争というしろものだった。

来たる二〇〇八年で神大の歴史の第二サイクルは終わりを迎える。この歴史の経過をどう評価するかは、時代の歴史の責任をになう、大学の管理責任者の職務であろう。私の場合、学園紛争の初期から最後に至るまで何らかのかたちでかかわらざるをえなかった。

私は学園紛争の初期にいやおうなしに回ってきた管理職にあつて、いかにこのいまわしい紛争から早期に脱却するかを念頭においた。歴史の四〇年周期は、その最初の十年間がとくに重要視される。だが、混乱に続く混乱はかさまりようがなかった。次の二〇年代に持ち越されたのは、混乱の收拾と建設の土台づくりを同時に進行するとうことだった。いまにして思えば、いかに自覚的のことであつたとはいえ、その戦闘的対応は思い出したくないほどぞつとするものだった。身の危険を伴うことは一度や二度ではなかった。

歴史は過ぎ去つてしまえば、事の仔細は問われずにすむのがよい。いや、何もなかったかのように後代において感じるのであれば、それにこしたことはない。おそらく神大の第二の歴史サイクルの苦境について、今後それを掘り返して検証しようとするのではないものと思われる。悪夢の歴史は洗い流して忘れたいからだ。

歴史は途中で停滞したり、つまずいたりすることはつねに起こりうることである。私は二〇〇三年に定年（三五年間）になり、神大の第二の歴史のサイクルのほぼ全過程を経験したことになるが、その出発点においては到達点の予想などつくはずもなかった。急務としてのしかかつてきたことは、神大の失われた十年を取り戻すべく、たえず大胆に先を急ぐということであつた。多少は駆け足的なところは否めないものの、歴史の果たすべき責任ある道に乗り遅れはしないかと懸念したこともあつた。しかし、二一世紀の神大の第三の歴史サイクル形成に向けて確実

にその地歩を固めている現状に希望をもちたい。

神大の人文学系の機関誌「人文研究」は、他の学内の紀要もそうであろうが、神大の紛争とは無関係に存続し、本来あるべき学問の道、大学のあり方さえも問うことになる学問研究の場を提示してくれるものであった。

私の研究業績は「人文研究」に大きく依存した。学問研究とは地道なものであり、革命的変革によって研究そのものが革命的形態のものに変容することがなかったのは、神大の第一の歴史サイクル時代に培われた「人文研究」の実績のおかげと感謝したい。その伝統が変わりなく後世に息づいていくことを期待したい。